古英語・中英語における「空主語」の認可と消失
ー話題卓立言語から主語卓立言語へー

縄田　裕幸*

Hiroyuki NAWATA
On the Licensing and the Demise of “Null Subjects” in Old and Middle English:
From a Topic Prominent Language to a Subject Prominent Language

【キーワード：英語史，空主語，素性継承，話題卓立言語，主語卓立言語】

1．序

よく知られているように，英語の定形節では主語が義務的に現れなければならない。主題役割をともなう主語が存在しない場合には，(1b) のように意味内容を持たない虚辞が主語位置に挿入される。

（1）英語
　a．*(They) sang.
　b．*(It) is obvious that *(it) rained.

それに対し，イタリア語やスペイン語では（2a）のように代名詞主語を省略することができる。また（2b）が示すように，英語の虚辞主語に相当する要素は現れない。

（2）スペイン語
　a．Cantaron
　　sing-PAST. 3rd. pl. “They sang.”
　b．(*Ello) es obvio que (*ello) llovió.
　　it is obvious that it rained
　　(Zagona (2002: 25))

このような言語間の変異は，原理・パラメター理論以降の生成統語論においては，（3）の「空主語パラメター」によって捉えられてきた。

（3）空主語パラメター：ある言語Lが定形節の空主語を｛許す／許さない｝。

このパラメターが英語では「許さない」に，イタリア語・スペイン語では「許す」に，それぞれ設定されている。すなわち，一見して主語が現れていない（2）のスペイン語でも，音声的に具現化されていない代名詞が現れていると想定するのである。また，空主語パラメターの設定には動詞屈折接辞の豊かさが密接に関連しているといわれている。例えば，(2a) では動詞の屈折接辞 -aron が３人称複数を表しているので人称代名詞が音声的に具現化される必要がないと考えるのは，直観的にも理にかなっているように思われる。

しかし，近年の極小主義（Chomsky（2000, 2008））の理論的枠組みでは，（3）のようなパラメターは文法モデル内での位置づけを失っており，その効果を独立した原理からどのように導くかが課題となっている（cf. Biberauer, Holmberg, Roberts, Sheehan（2010））。また経験的な問題点として，空主語の認可と動詞屈折接辞の豊かさがどの程度，あるいはどのように関連しているのかはいまだによくわかっていない。例えばイタリア語やスペイン語とは類型的に異なる日本語では，動詞が人称や数に関する一致を示さないにもかかわらず，空主語が許される。

（4）この間（僕たちは）公園でサッカーをしたよ。

したがって，空主語の認可をどのように理論的に定式化するかは，形態と統語の相関関係を探る上でも興味深い題材である。

このような問題意識を背景として，本稿では英語史における「空主語（pro）」の消失を考察する。[1]近年の通時的コーパスの発達により，古英語でproが許されていたことが明らかになってきた（第２節）。しかし，中英語のデータを観察すると，英語でかつて許されたproは実際には空の話題要素とみなすのが妥当であること，またそれらが後期中英語では消失していたことがわかる（第３節）。そこで本稿では，先行研究の洞察をふまえながらproの統一的認可条件を提案する。具体的には，人称代名詞は性・数・人称を表すファイ素性の値が不完全である場合に音声側のインターフェイスでゼロ形態素として具現化されるが，当該の派生が収束するためには，素性の値がなるべく完全であることを要求する解釈側のインターフェイス条件も同時に何らかの方法で満たされる必要がある（第４節）。すると，後期中英語におけるproの消失は，英語が話題卓立言語から主語卓立言語へと移行することによって，解釈側インターフェイスの要請が満たされなくなったことで生じたものと理解することができる。理論的には，この一連の変化は細分化されたCP構造において，解釈不可能なファイ素性の生起位置が推移した効果として捉えられる（第５節）。

*　島根大学教育学部言語文化教育講座

2．古英語におけるpro

英語の史的統語論研究において，古英語でproが許されたかどうかは長く議論の的となってきた。下の例が示すとおり，古英語で虚辞主語や天候を表すitが随意的であったという点では，多くの研究は見解が一致している。

（5）ðætte forðy *pro* to ungemetlice ne sie
that therefore too greatly not be
geliðod ðæm scyldgan
let-off to-the guilty
"that therefore it must not be let off too greatly to the guilty" (CP 20.149.24 / Fischer et al. (2000: 39))

（6）Ða cwom þær micel snaw & *pro* swa
then came there heavy snow and so
miclum sniwde swelce micel flys feolle
heavily snowed as if much fleece fell
"and it snowed so heavily, as if a lot of fleece were falling" (Alex 30.11 / ibid.)

問題となるのは，古英語が前節（2a）のような指示的人称代名詞の脱落を許したかどうかである。Hulk and Kemenade（1993, 1995）は，古英語は虚辞主語の脱落のみを許し，人称代名詞は現代英語と同様に義務的であったと述べている。

しかし，Gelderen（2000）はVisser（1963–1973）からの以下の例を示して，古英語が指示的代名詞の脱落を許したと論じている。

（7）þeah *pro* ðe hord-welan heolde lange
though the treasure held long
"though *he* held the treasure long."
(Beo 2344 / Gelderen (2000: 127))

（8）*pro* Het hi þa swingan
ordered her then beat
"*He* ordered her then to be beaten."
(Juliana 142 / ibid.: 128)

（9）Nearwe *pro* genyddon on norðwegas
anxiously hastened on north-way
"Anxiously, *they* hastened north."
(Exodus 68 / ibid.: 129)

（10）*pro* namon þa to rede, ...
took then to council
"*They* took then to council ..."
（Hom I, 316.23 / ibid.: 131）

（11）Forþa ic nu wille geornlice to Gode cleopian.
therefore I now want earnestly to God speak
pro Ongan þa giddien
began then sing
"Therefore, I now want to speak to God earnestly. Then *he* began to sing."
(Alfred, Boethius 9.28–9 / ibid.)

またGelderen は古英語のproが次のような特性を持っていたと指摘している。第一に，（7）–（11）の例からもわかるとおり，古英語で人称代名詞が脱落した場合には主として3人称として解釈され，1・2人称代名詞の脱落は不可能ではないがまれであった。Gelderenにならい，この人称によるpro生起の非対称性を「人称分離（person-split）」とよぶことにしよう。第二に，Gelderenは人称代名詞の脱落が（7）のような（通例話題化の生じない）従属節や，すでに先頭位置が話題要素で占められている（9）のような文でも生じたことから，古英語のproが話題要素の省略された「空の話題要素」ではなく，あくまで主語が省略された「空主語」であったと述べている。

Gelderen（2000）の研究は主としてVisser（1963–1973）からの用例に依拠していたが，その一方で，近年における電子コーパスの発達によってproの分布を網羅的・計量的に検証することが可能になった。Walkden（2011）は The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose（Taylor, Warner, Pintzuk and Beths（2003）; YCOE）および The York-Helsinki Parsed Corpus of Old English Poetry（Pintzuk and Plug（2000）; YCOEP）を調査し，以下の事実を明らかにした。

（12）a．古英語において，指示的人称代名詞は一定の頻度で脱落した。
b．しかし，次のような非対称性も同時に観察される。
（i）proの生産性はテキストによって異なる。
（ii）proは従属節よりも主節において高い頻度で観察される。
（iii）proの解釈に関する人称分離現象が認められる。
c．人称代名詞は主語としてだけでなく，（13）のように目的語としても脱落することがあった。

（13）hie … leton holm beran *pro* / geafon *pro* on
they let sea bear gave on
garsecg
ocean
"they let the sea bear *him,* gave *him* to the ocean"
(cobeowul, 4.47.41–42 / Walkden (2011: 7))

このうち，（12bii）以外の点はすでにGelderen（2000）で指摘されていたことであり，コーパス調査によってその裏付けが得られたことになる。（12bi）に関して，Walkden（2011）は主節・等位節・従属節のいずれかで「pro+代名詞主語」に占めるproの割合が2％以上の頻度で観察されるテキストとして，Ælfric's Lives of Saints, Bede's History of the English Church, Beowulf, Anglo-Saxon Chronicle（C, D, E）, Bald's Leechbook, Orosiusを挙げている。すくなくともこれらのテキストの著者は指示的proを容認していたといえよう。他方で，Walkdenの調査によって新たに明らかになった（12bii）の事実は，古英語のproが空主語であって空の話題要素ではないというGelderen の仮説からは説明することが難しい。

3．中英語におけるpro

古英語のproの特性は中英語でも引き続き保持されたのであろうか。また，proを許さない現代英語型の文法はいつ確立したのであろうか。これらの点を確かめるため，中英語の史的コーパスThe Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, second edition（Kroch and Taylor（2000）；以下PPCME２）を調査した。

下の表１は，PPCME2における「空主語（pro）」と代名詞主語の生起状況をまとめたものである。PPCME2では定形節の「空主語」には*pro*，代名詞主語にはPROという品詞タグがそれぞれ付けられているため，これらを検索することでproと代名詞主語の分布傾向を把握することができるのである。表の上段は主節，下段は従属節であり，それぞれM1（1150–1250），M2（1250–1350），M3（1350–1420），M4（1420–1500）という４つの年代に区分されている。[2]また，テキストの名称はPPCME2のファイル名によって表記している。表中，網掛けになっているセルは「pro+代名詞主語」に占めるproの割合が２％を超える箇所である。前節のWalkden（2011）の基準にしたがい，これらのテキストではproが文法的に許されたとみなす。

この表から読み取ることができるのは，以下の３点である。

（14）a．proの生産性はテキストによって異なる。
　　b．proが文法的に許されたテキストはM1期とM2期に集中している。[3]
　　c．proは従属節よりも主節において高い頻度で観察される。

（14b）に関して，表１においてM1期とM2期で網掛けとなっているテキストはAncrene Riwle, Hali Meidhad, St. Juliana, St. Katherine, The Lambeth Homilies, The Peterborough Chronicle, Sawles Warde, Trinity Homilies, Kentish Sermonsである。ここから，古英語タイプのproは引き続き中英語でも一定期間許されていたことがわかる。しかし，proの生起率が２％を超えるテキストがM3期にはないことから，proは1350年から1420年の間にはすでに消失していたと考えるのが妥当であろう。また（14c）の特性は，表１においてproの生起率が２％を超える網掛けセルが従属節よりも主節において多いことから見て取ることができる。この主節と従属節の非対称性はWalkden（2011）の調査によって示された古英語の特性（12bii）と共通しており，単なる偶然ではないと思われる。

表１　PPCME2における「空主語（pro）」と代名詞主語の生起状況

	M1（1150–1250）				M2（1250–1350）				M3（1350–1420）				M4（1420–1500）			
	ファイル名	pro	代名詞	pro生起率	ファイル名	pro	代名詞	pro生起率	ファイル名	pro	代名詞	pro生起率	ファイル名	pro	代名詞	pro生起率
主節	cmancriw–1.m1.psd	22	555	3.97%	cmayenbi.m2.psd	9	530	1.67%	cmaelr3.m23.psd	3	203	1.48%	cmaelr4.m4.psd	0	180	0%
	cmancriw–2.m1.psd	19	209	9.09%	cmearlps.m2.psd	2	1864	0.11%	cmastro.m3.psd	0	72	0%	cmcapchr.m4.psd	2	1222	0.16%
	cmhali.m1.psd	12	87	13.79%	cmkentse.m2.psd	5	54	9.26%	cmbenrul.m3.psd	1	309	0.32%	cmcapser.m4.psd	0	24	0%
	cmjulia.m1.psd	10	43	23.26%					cmboeth.m3.psd	0	10	0%	cmedmund.m4.psd	0	129	0%
	cmkathe.m1.psd	10	47	21.28%					cmbrut3.m3.psd	7	766	0.91%	cmedthor.m34.psd	1	282	0.35%
	cmkentho.m1.psd	1	97	1.03%					cmcloud.m3.psd	0	257	0%	cmfitzja.m4.psd	0	52	0%
	cmlamb1.m1.psd	4	78	5.13%					cmctmeli.m3.psd	0	53	0%	cmgaytry.m34.psd	0	20	0%
	cmlambx1.mx1.psd	3	338	0.89%					cmctpars.m3.psd	1	385	0.26%	cmgregor.m4.psd	2	542	0.37%
	cmmarga.m1.psd	10	50	0.20%					cmedvern.m3.psd	0	223	0%	cmhilton.m34.psd	0	46	0%
	cmorm.m1.psd	0	699	0%					cmequato.m3.psd	0	49	0%	cminnoce.m4.psd	0	40	0%
	cmpeterb.m1.psd	5	134	3.73%					cmhorses.m3.psd	1	72	1.39%	cmjulnor.m34.psd	0	131	0%
	cmsawles.m1.psd	0	7	0%					cmmandev.m3.psd	4	1070	0.37%	cmkempe.m4.psd	1	1337	0.07%
	cmtrinit.mx1.psd	36	396	9.09%					cmntest.m3.psd	0	178	0%	cmmalory.m4.psd	8	996	0.80%
	cmvices1.m1.psd	5	398	1.26%					cmotest.m3.psd	0	102	0%	cmmirk.m34.psd	7	986	0.71%
									cmpolych.m3.psd	6	720	0.83%	cmreynar.m4.psd	0	43	0%
									cmpurvey.m3.psd	0	466	0%	cmreynes.m4.psd	0	80	0%
									cmwycser.m3.psd	0	844	0%	cmrollep.m24.psd	0	312	0%
													cmrolltr.m24.psd	0	318	0%
													cmroyaL.m34.psd	0	83	0%
													cmsiege.m4.psd	0	221	0%
													cmthorn.mx4.psd	2	38	5.26%
													cmvices4.m34.psd	2	138	1.45%
	M1（1150–1250）				M2（1250–1350）				M3（1350–1420）				M4（1420–1500）			
	ファイル名	pro	代名詞	pro生起率	ファイル名	pro	代名詞	pro生起率	ファイル名	pro	代名詞	pro生起率	ファイル名	pro	代名詞	pro生起率
従属節	cmancriw–1.m1.psd	21	1111	1.89%	cmayenbi.m2.psd	14	876	1.60%	cmaelr3.m23.psd	1	423	0.24%	cmaelr4.m4.psd	0	304	0%
	cmancriw–2.m1.psd	6	352	1.70%	cmearlps.m2.psd	1	397	0.25%	cmastro.m3.psd	0	63	0%	cmcapchr.m4.psd	0	765	0%
	cmhali.m1.psd	4	224	1.79%	cmkentse.m2.psd	3	84	3.57%	cmbenrul.m3.psd	1	533	0.18%	cmcapser.m4.psd	0	29	0%
	cmjulia.m1.psd	1	92	1.09%					cmboeth.m3.psd	0	17	0%	cmedmund.m4.psd	0	53	0%
	cmkathe.m1.psd	1	107	0.93%					cmbrut3.m3.psd	1	754	0.13%	cmedthor.m34.psd	0	375	0%
	cmkentho.m1.psd	0	105	0%					cmcloud.m3.psd	1	480	0.21%	cmfitzja.m4.psd	1	50	2.00%
	cmlamb1.m1.psd	1	123	0.81%					cmctmeli.m3.psd	0	65	0%	cmgaytry.m34.psd	0	137	0%
	cmlambx1.mx1.psd	5	498	1.00%					cmctpars.m3.psd	0	551	0%	cmgregor.m4.psd	1	241	0.41%
	cmmarga.m1.psd	0	71	0%					cmedvern.m3.psd	0	311	0%	cmhilton.m34.psd	1	121	0.83%
	cmorm.m1.psd	0	1248	0%					cmequato.m3.psd	0	59	0%	cminnoce.m4.psd	0	65	0%
	cmpeterb.m1.psd	1	118	0.85%					cmhorses.m3.psd	1	135	0.75%	cmjulnor.m34.psd	0	137	0%
	cmsawles.m1.psd	2	25	8%					cmmandev.m3.psd	1	842	0.12%	cmkempe.m4.psd	1	1469	0.07%
	cmtrinit.mx1.psd	26	772	3.37%					cmntest.m3.psd	0	80	0%	cmmalory.m4.psd	3	544	0.55%
	cmvices1.m1.psd	2	646	0.31%					cmotest.m3.psd	0	76	0%	cmmirk.m34.psd	4	1178	0.34%
									cmpolych.m3.psd	0	518	0%	cmreynar.m4.psd	0	51	0%
									cmpurvey.m3.psd	0	354	0%	cmreynes.m4.psd	0	63	0%
									cmwycser.m3.psd	1	1008	0.10%	cmrollep.m24.psd	2	591	0.34%
													cmrolltr.m24.psd	1	396	0.25%
													cmroyaL.m34.psd	0	104	0%
													cmsiege.m4.psd	0	89	0%
													cmthorn.mx4.psd	1	63	1.59%
													cmvices4.m34.psd	0	175	0%

proの認可システムとproが消失した原因については次節以降で詳しく議論するが，ここではまず，古英語および中英語のproが空の主語であるか，それとも空の話題要素であるかについて考えておきたい。結論からいえば，本稿はGelderen（2000）とは異なり，古英語・初期中英語のproは主語ではなく話題要素として認可されていたと主張する。

古英語のproが空主語であったとするGelderen（2000）の論拠は，いくつかの前提条件の上に成り立っている。まず，（9）のようにすでに先頭位置が話題要素で占められている文でproが生じているのでproは話題要素ではないという点に関していえば，このproが主語であるためには「古英語では1つの節につき話題要素は1つしか生じることができなかった」という前提を受け入れなければならない。なぜなら，もし複数の要素が話題化されることができたのであれば，proがそれら2つの話題要素のいずれかとして生じていた可能性が依然として残るからである。実際には，（15）のように複数の話題要素が文頭に生じることは古英語では珍しくなかった。

（15）Him þa andswarode his eardorbisceop,
him then answered his high priest
“The high priest then answered him,”
(Bede 2.10.134.11 / Fischer et al. (2000: 61))

古英語は現代ドイツ語などと同じ動詞第二位（verb second: V2）語順を示したが，常に定形動詞が主節の第二要素として生じていたわけではない。（15）では定形動詞andswarode‘answered’が主語his eardorbisceop‘his high priest’の前に現れているが，さらにその前に2つの話題要素him‘him’とþa‘then’が現れている。したがって，（9）のような例においてもproが空の話題要素である可能性を考慮に入れるべきであろう。

その可能性を裏付ける証拠として，古英語の話題要素先頭文で主語が代名詞として現れたときには，その代名詞主語はほぼ義務的に定形動詞に先行していた。

（16）Be ðæm we magon suiðe swutule oncnawan ðæt
by that we may very clearly perceive that
“By that, we can perceive very clearly that …”
(CP 26.181.16 / ibid.: 40)

V2言語における定形動詞の左側が話題要素の領域であるとすると，（16）のような例では，旧情報を表す代名詞が主語位置から話題位置へと左方移動を受け，話題要素として認可されていると分析することができる（より具体的な構造的説明については5節を参照）。もしこのような理解が正しければ，主節の代名詞主語は常に話題要素として解釈され，それゆえ「空の代名詞主語」たるproも主語位置ではなく話題位置で認可を受けていたということになろう。

次に，従属節におけるproの生起状況を考えてみたい。Gelderen（2000）が古英語のproが話題要素ではないと主張したもうひとつの根拠は，主節だけでなく従属節でもproが生起できたという点であった。これは「従属節では話題要素が生じない」という前提に基づいている。たしかに，Walkden（2011）によるYCOE, YCOEPの調査および本稿のPPCME2の調査でも，従属節でproが観察されている。しかしながら（12bii），（14c）で指摘されているように，従属節におけるproの生起頻度は主節に比べて低い。もし古英語・初期中英語のproが真の主語であったならば，proは主節と従属節で同じように生じたはずであり，両者の非対称性は説明することができない。

ここでも「従属節では話題要素が生じない」という前提条件を疑ってみる必要がある。なぜなら，表面的には接続詞に導かれていても実質的に主節の統語的特徴を示す「疑似主節」の可能性があるからである。ここで再び，PPCME2のデータを検討してみよう。初期中英語はまだV2特性を保持していたので，ある従属節が擬似的な主節であるか真の従属節であるかは語順を手がかりに判断することができる。定形動詞と非定形動詞が共起する場合，疑似主節であればV2効果によって定形動詞が非定形動詞に先行する語順となり，真の従属節であれば定形動詞が非定形動詞に後続する動詞終末（verb final: VF）語順となる。表1の下段に分類される従属節において，主語が代名詞の場合にはこれらいずれの語順も観察される。[4]

（17）a．代名詞主語–法助動詞–不定詞
ðat we ne sculen habbe twifeald wæiȝe ne
that we not shall have twofold wage nor
twifeald imett
twofold measuring rod
(M1; CMVICES1, 11.123)

b．代名詞主語–不定詞–法助動詞
þo he him seluen habben ne mihte
though he himself have not might
(M1; CMTRINIT, 183.2550)

他方で，主語が顕在的に現れていない従属節では，定形動詞が非定形動詞に先行する疑似主節型の語順のみが観察され，典型的な従属節型のVF語順はみられなかった。

（18）a．pro主語–have–完了分詞
þe kinedom þe *pro* haueð bihaten to hise
the kingdom that had promised to his
icorene
chosen (M1; CMANCRIW-1, II.147.1995)

b．pro主語–have–受動分詞
Ac þere fore seith þet godspel þet *pro* hedden
but therefore says that gospel that had
ibe idel
been ideal (M2; CMKENTSE, 221.203)

したがって，初期中英語ではproは従属節でも主節に類した環境でのみ生じることができたと結論づけられる。そしてこのことは，初期中英語のproが空主語ではなく空の話題要素であったことを強く示唆している。そう考えれば，主節に比べて従属節での生起頻度が低いことも

うまく説明することができる。

上の（18）にみられるような語順制約が古英語でも認められるかどうかは今後の調査課題としておくが，古英語が主語代名詞だけでなく目的語代名詞の脱落も許したことや（cf.（12c）），古英語でもproの生起頻度に関する主節と従属節の非対称性がみられたという事実は（cf.（12bii）），古英語のproが空主語であったというGelderenの説とは相容れないが，空の話題要素であったと仮定すれば矛盾は生じない。したがって，ここでは後者を最善の仮説として採用したい。

以上，本節で得られた結論は次のようにまとめられる。

（19）a．英語のproは初期中英語までは許されたが，後期中英語には消失した。[5]
　　b．古英語・初期中英語のproは空主語としてではなく空の話題要素として認可されていた。

この結論をふまえて，次節以降ではproの認可システムと消失の原因について，理論的観点からの分析を試みる。

4．proの認可条件

この節では proの認可条件を提案する。まず4.1節では先行研究の論点を整理し，それらが古英語・初期中英語に適用できるかどうかを検討する。その上で4.2節においてこれら先行研究の洞察を取り入れた代案を提示する。

4.1．先行研究における３つの観点

4.1.1．動詞の一致による同定

本稿冒頭（２）で紹介したイタリア語・スペイン語タイプのproに関しては，Rizzi（1982, 1986）が屈折辞INFLによる認可方法を提案し，後続の研究に大きな影響を与えた。

（20）a．INFL can be specified [+pronoun].
　　b．INFL which is [+pronoun] can be referential.
(Rizzi (1982: 142))

[+pronoun]を指定されたINFLはproを形式的に認可することができ，さらに指示的（referential）なINFLはproの指示内容を同定することができる。INFLが指示的であるかどうかは当該言語の動詞屈折接辞が豊かであるかどうかに依存しており，例えば主語代名詞を省略することができるスペイン語では，動詞の屈折変化は（21）のようになっている。

（21）スペイン語の動詞変化表

	現在形		過去形	
	単数形	複数形	単数形	複数形
1 人称	-o	-amos	-é	-amos
2 人称	-as	-áis	-aste	-asteis
3 人称	-a	-an	-ó	-aron

ここからわかるように，スペイン語の動詞は現在形と過去形のいずれにおいてもすべての人称と数で屈折形が異なっている。したがって動詞屈折の形をみれば，proの数と人称を識別し，その指示内容を同定することができるのである。

しかし，本稿で扱っている古英語・初期中英語はイタリア語やスペイン語ほど豊かな屈折を持っていたとはいいがたい。（22）は初期中英語の動詞屈折変化である。

（22）初期中英語の動詞変化表

	現在形		過去形	
	単数形	複数形	単数形	複数形
1 人称	-e	-en	-de	-den
2 人称	-st	-en	-dst	-den
3 人称	-th	-en	-de	-den

現在形と過去形のいずれにおいても複数形の人称が区別されておらず，さらに過去形では１人称と３人称の単数形が同じ形になっている。したがって，動詞の屈折変化のみからproの指示内容を同定することはできない。

4.1.2．談話による同定

proを許す言語がすべて豊かな屈折を持っているわけではないことは早くから指摘されてきた。典型的な例が，動詞が人称・数の変化をまったく示さないにもかかわらず主語を脱落させることができる日本語・中国語などの東アジア言語である（cf.（4））。このような，動詞の屈折に依存しない主語脱落は一般に「強い主語脱落（radical pro drop）」とよばれる。Huang（1984, 1989）は，これらの言語における空主語は話題化された名詞句によって束縛される変項（variable）であり，その指示内容は談話によって同定されると論じた。

ここで注目したいのが，屈折接辞が豊かでないにもかかわらずproを許容する東アジア言語は，英語・イタリア語・スペイン語のような「主語卓立言語」ではなく「話題卓立言語」の特徴を示すという点である。Li and Thompson（1976）は主語卓立言語と話題卓立言語を次のように定義している。

（23）In subject-prominent (Sp) languages, the structure of sentences favors a description in which the grammatical relation subject-predicate plays a major role; in topic-prominent (Tp) languages, the basic structure of sentences favors a description in which the grammatical relation topic-comment plays a major role. (Li and Thompson (1976: 459))

簡潔にいえば，主語卓立言語は「主部–述部」を基本構造とする言語であり，話題卓立言語は「話題–評言」を基本構造とする言語である。前節で概観したとおり，古英語・初期中英語はV2語順によって話題要素が文頭を占めるので，話題卓立言語である。したがって，そこで生じているproは上述の東アジア言語と同様，談話の中で同定されている可能性があるだろう。

4.1.3. 代名詞の形態的特性

Neeleman and Szendrői（2007）は代名詞の形態的構造に着目して，「強い主語脱落は代名詞が膠着的形態特性を持つ場合に許される」という一般化を提示している。例えば，日本語の男性単数３人称主格の人称代名詞は，性・数・人称を表す語幹「彼」に格を表す接辞「が」を添加して「彼-が」となる。これに対し，英語ではこれらの文法素性は単一の形態素/he/として具現化される。彼らの分析によれば，日本語と英語の代名詞の構造はそれぞれ（24a, b）のように表される。

（24）a. $[_{KP}\ [_{NP}$ 彼] が]
　　b. $[_{KP}$ he]

Neeleman and Szendrői は，proに相当するゼロ形態素/∅/はKP全体を標的として具現化されると提案している。日本語では音形を持つ代名詞/kare/がNPを標的とするため，/kare/と/∅/は競合しないが，英語では/∅/は同じくKPを標的とする/he/と競合する関係にあり，その場合には音形を持つ/he/に優先権が与えられるので，英語では強い主語脱落が生じることができないと論じている。彼らの分析が正しければ，強い主語脱落のproは，通常の代名詞が音声的具現化を免れた結果生じたものであるということになる。しかし，古英語・初期中英語の人称代名詞は，現代英語と同様に性・数・人称・格を同時に表す屈折型の形態特性を持っていたので，Neeleman and Szendrői（2007）の分析をそのまま古英語・初期中英語に適用することはできない（彼らの分析に対する反論としてはSato and Kim（2012）も参照）。

4.1.4. まとめ

以上，先行研究から得られる洞察は（25）のようにまとめられる。

（25）a. 豊かな一致を示す言語では，動詞屈折接辞が代名詞と同じ役割をはたしている。
　　b. 話題卓立言語では，proは談話から指示内容を得ている。
　　c. 強い主語脱落は，通常の代名詞が何らかの理由で音声的に具現化されない場合に生じる。

解決しなければならない問題は２つある。第一に，先行研究ではイタリア語・スペイン語タイプのproと東アジア言語のproは完全に別個の条件によって認可されており，両者の間に互換性がない。第二に，古英語・初期中英語のproはいずれの認可方法によっても扱うことができず，またなぜ後期中英語でproが消失したのかについても説明を与えることができない。

4.2. 代案

上の（25）は，proが認可される仕組みの一端をそれぞれ異なった側面から捉えたものであると理解することができる。本稿では，これら先行研究の提案を一部修正して，（26）のインターフェイス条件として統一的に捉えたい。

（26）a. 感覚・運動（sensory-motor: S-M）インターフェイス条件：ある代名詞が形態的具現化に必要なファイ素性を欠く場合には，その代名詞はゼロ形態素によって具現化される。
　　b. 概念・意図（conceptual-intentional: C-I）インターフェイス条件：ある代名詞が適切に解釈されるためには，その指示性を復元するための十分な解釈可能素性を備えていなければならない。

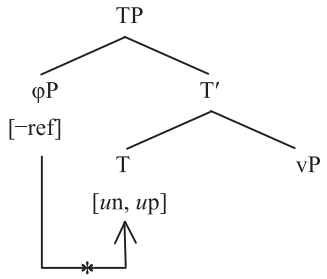
（26a）は，proが独立した語彙項目ではなく，代名詞が音声的に具現化されなかったものであるというNeeleman and Szendrői（2007）の基本的洞察にしたがっているが，ここでは代名詞の膠着性ではなく，代名詞の素性指定が不完全であることがproの音声的成立要件であると考える。また，（26b）の「十分な解釈可能素性」は厳密に定義された用語ではないが，ここではイタリア語・スペイン語タイプのproを念頭において，すくなくとも人称と数に関する情報が必要であると（暫定的に）仮定しておく。

ここで，上記２つの条件がproの認可に関して相反する要求を課している点に注意されたい。例えば英語では，代名詞の形態的具現形は性・数・人称・格の値に応じて決定されるが，これは音韻部門における形態統語素性と音韻素性の対応規則として表すことができる（cf. Halle and Marantz（1993）；なお，Holmberg（2005）の表記法にならって代名詞の範疇をφPと表す）。

（27）a. $[_{\varphi P}$ m., sg., 3rd, acc.] ⇔ /him/
　　b. $[_{\varphi P}$ pl., 1st, nom.] ⇔ /we/
　　c. $[_{\varphi P}$ pl., 3rd, nom.] ⇔ /they/
　　d. $[_{\varphi P}$ pl.] ⇔ /∅/

もし（27d）のようにφPに十分な情報量が指定されていない場合には，音韻部門はφPの形態を特定することができないので，条件（26a）によってφPは音声的に具現化されず，ゼロ形態，すなわちproとして現れる。しかし，ファイ素性の指定が不完全なこのようなφPは条件（26b）によってC-Iインターフェイスで排除される。また，φPの素性が不完全な場合には，動詞の屈折変化を担う機能範疇が持つ解釈不可能なファイ素性が一致によって値を得ることができないので，その理由によっても派生は破綻する。その関係を図式的に示したのが（28）である。[*u*n, *u*p]は解釈不可能な数・人称素性であり，[−ref（erential）]はφPの指示性が不十分であることを表している。

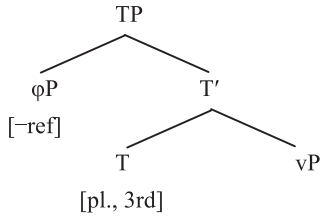
（28）現代英語（値付与不可能）



このように，動詞の一致が貧弱でかつ主語卓立型である英語は，(26a, b) の相反する条件を同時に満たすことができないため，proを認可しない。

では，φPが形態的具現化に必要なファイ素性を欠いているにもかかわらずC-Iインターフェイスで適切に認可されるのはどのような場合であろうか。ひとつは，イタリア語・スペイン語タイプの「豊かな一致」を持つ言語である。Rizzi (1982, 1986) にしたがい，これらの言語では動詞の屈折接辞が独自の指示性を持っている，すなわち屈折接辞のファイ素性自体が解釈可能であると仮定しよう。

(29) イタリア語・スペイン語（値付与不必要）



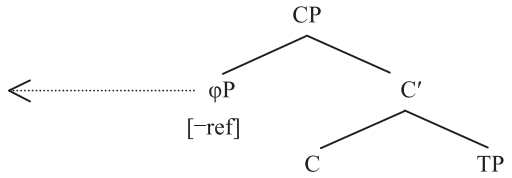
この場合，屈折接辞のファイ素性にはじめから値が指定されているので，それによって (26b) のC-Iインターフェイス条件が満たされる。よって，もしφPのファイ素性指定が不完全であれば，音韻部門でゼロ形態として具現化され，proが生じる。[6]

もうひとつのケースは，動詞が数・人称による一致を持たない日本語や中国語である。このタイプの言語に関して，以下の2点を仮定する。

(30) a. 日本語・中国語の屈折辞は主語とのファイ素性一致による認可を必要としない (cf. Jaeggli and Safir (1989))。
b. φPが話題要素としてCP領域にある場合，談話連結 (context linking) によって指示性を得ることができる (cf. Huang (1984, 1989))。

関連する構造は (31) のようになる。

(31) 日本語・中国語（談話連結）



(30a) により，たとえφPのファイ素性指定が不十分であっても動詞屈折の認可に関する問題は生じないことが保証される。また (30b) によって，$\varphi P_{[-ref]}$は談話連結から指示性を得ることで$\varphi P_{[+ref]}$に転じ，インターフェイスで解釈を受けることができる。よって，動詞の屈折接辞によって指示性を復元することができない強い主語脱落が日本語や中国語などの話題卓立言語でのみ観察され，英語のような主語卓立言語ではみられないことがおのずと導かれる。[7]

5．英語史におけるproの認可と消失

では，前節で提案した理論的枠組みに基づいて，英語史におけるproの認可と消失について分析しよう。解決すべき問題は (32) の2点である (cf. (19))。

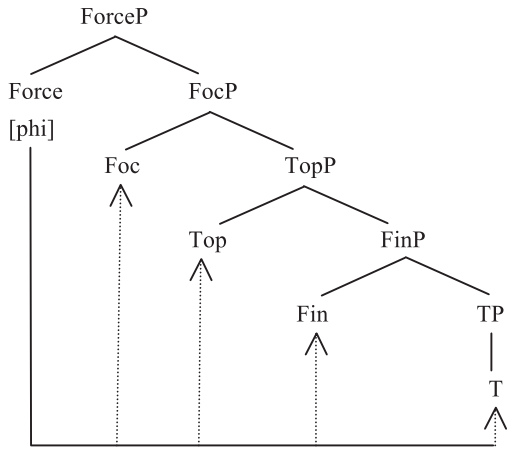
(32) a. なぜproは古英語・初期中英語で許されたか。
b. なぜproは後期中英語に消失したか。

このうち (32a) に含まれる下位論点として，(i) なぜproは従属節よりも主節で頻出したか，(ii) なぜ話者によってproの生産性が異なったか，(iii) なぜproは3人称での使用に傾斜していたかが挙げられる (cf. (12), (14))。以下，5.1節でNawata (2009, 2011) に基づいて古英語・中英語の基本的句構造とパラメター変異を導入し，5.2節と5.3節で (32a, b) の論点をそれぞれ検討する。

5.1．素性継承パラメター

Nawata (2009, 2011) は，英語史におけるV2語順の衰退をRizzi (1997) による細分化されたCP構造とChomsky (2008)，Richards (2007) による素性継承システムにより分析している。Nawataによれば，英語はその歴史を通じて (33) の基本的句構造を保持しており，V2語順の消失をはじめとするいくつかの通時的統語変化は，文タイプを担うフェイズ主要部Forceに基底生成されたファイ素性が，どの非フェイズ主要部へ継承されるかが変化したことによって生じた（点線矢印は，理論上可能な素性継承の着地点を示す）。

(33)



具体的には，古英語・初期中英語では話題要素を認可する主要部Topが解釈不可能な数素性を，そして定性を表す主要部Finが解釈不可能な人称素性をそれぞれ担っていたが，後期中英語・初期近代英語ではFinがこれらの素性をともに受け持つようになったと提案されている。

(34) a. 古英語・初期中英語
Top ⇔ φ[*u*number]
Fin ⇔ φ[*u*person]
b. 後期中英語・初期近代英語
Fin ⇔ φ[*u*number, *u*person]

この素性継承に関するパラメター変化は，動詞屈折接辞の衰退によってもたらされた。(35) に再掲する初期中英語の動詞変化表と後期中英語の変化表 (36) を比較してみよう。

(35) 初期中英語の動詞変化表（=(22)）

	現在形		過去形	
	単数形	複数形	単数形	複数形
1 人称	-e	-en	-de	-den
2 人称	-st	-en	-dst	-den
3 人称	-th	-en	-de	-den

(36) 後期中英語の動詞変化表

	現在形		過去形	
	単数形	複数形	単数形	複数形
1 人称	-e	-e	-de	-de
2 人称	-st	-e	-dst	-de
3 人称	-th	-e	-de	-de

両者の違いは，初期中英語ではもっぱら複数形を表す接辞-enが存在していたが，後期中英語ではこの形態素が-eへと弱化している点にある。ここでは説明の細部には立ち入らないが，この形態的変化によって人称と数が単一の形態素によって表されるようになり，(34a) から (34b) へのパラメター変化が生じた。さらに，このパラメター変化によってV2語順が消失して英語は話題卓立言語から主語卓立言語へと変貌した（詳細はNawata (2009) を参照)。

5.2. 古英語・初期中英語におけるproの認可

(33) の句構造と (34a) の素性分布が与えられると，古英語・初期中英語における主節のV2語順と従属節のVF語順の派生はそれぞれ (37a, b) のように示される（便宜上語彙は現代英語のものを用いている)。

(37) a. 主節V2語順

$[_{ForceP}$ Force $[_{TopP}$ that man$_j$ Top+$\varphi_{[sg.]}$ $[_{FinP}$ helped+$\varphi_{[3rd]}$ $[_{TP}$ John$_i$ t_T $[_{vP}$ t_i t_v $t_j]]]]]$

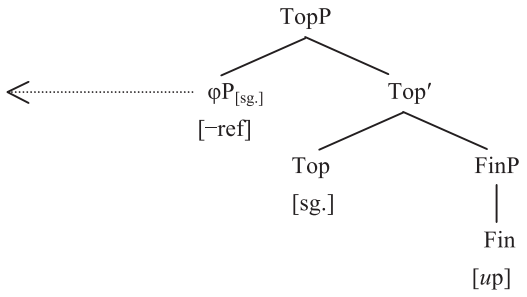
b. 従属節VF語順

I think $[_{ForceP}$ that $[_{TopP}$ $[_{TP}$ John$_i$ t_T $[_{vP}$ t_i t_v that man]] Top+$\varphi_{[sg.]}$ $[_{FinP}$ helped+$\varphi_{[3rd]}$ $t_{TP}]]]$

どちらの派生においても，定形動詞はファイ素性を持つ最上位の機能範疇であるTopとの局所的関係を成立させるためにFinまで主要部移動している（cf. Bobaljik (2002)）。さらに，Topが要求する話題基準（Topic Criterion: Rizzi (1997)）を満たすために何らかの要素がTopP指定部に移動しなければならない。主節では話題要素が移動することでこの基準が満たされ，V2語順が得られる。それに対して，従属節では定形動詞がFinに主要部移動した後，TP全体が残余移動（remnant movement）によってTopP指定部に移動してVF語順が派生される。

古英語・初期中英語でproが生じるのは，上の (37a) の構造においてTopP指定部を代名詞φPが占め，かつそのファイ素性の指定が不完全である，より具体的には数素性のみが指定されて人称素性を欠いているである場合である。関連する構造は (38) のようになる。

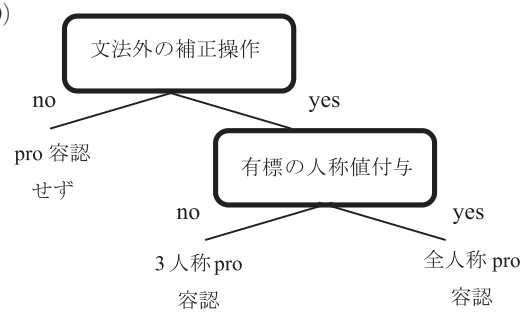
(38) 古英語・初期中英語（談話連結）



これはちょうど，日本語・中国語でproが認可される構造 (31) と同じである。φPは話題要素としてTopP指定部を占めるため談話連結によって指示性を獲得することができる。これが古英語・初期中英語の主節でproが許された理由である。他方，(37b) のVF語順ではφPが単独で話題要素として認可されていないため談話連結によって指示性を得ることができず，$\varphi P_{[-ref]}$はC-Iインターフェイスで適切に解釈されない。よって，古英語・初期中英語のproは空の話題要素として主節か疑似主節においてのみ現れることができたのである。

ただし，英語が日本語などと異なるのは，動詞の屈折接辞に値を付与しなければならない点である。(38) では，Topの数素性はφPとの一致により値を得ることができるが，Finの人称素性は統語部門でφPと一致することができない。そこで，談話連結によって得られたφPの人称の値が，文法外の補正操作によってFinの人称素性にコピーされると仮定しよう（関連する議論としてSobin (1997) を参照)。ただし，このような周辺的操作の利用可能性には個人差があるため，proを容認しなかった話者もいたであろう。さらにFinの人称素性は通例無標の値である 3 人称に限定されていたが，時に 1 ・ 2 人称の値が許容されることがあったとすると，人称素性の値付与に関する有標性の階層は (39) のように表される。

(39)



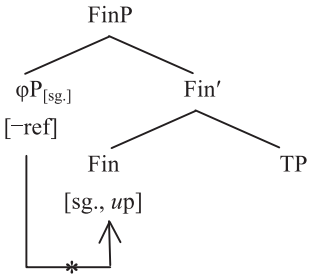
左側から順にproの許容度が高まり，かつそれを許す文法の有標性も高くなっている。このような階層関係を想定することで，古英語・初期中英語では限られたテキストでのみ指示的proが許されたことと，proが生じた場合は主に 3 人称で解釈されたことを導くことができる。話題要素としてのproが主節か疑似主節でのみ現れることができた点とあわせて，本節の冒頭で挙げたproの生起

に関する３つの非対称性を説明できたことになる。

5.3．後期中英語におけるproの消失

その後，後期中英語になると（34b）のようにFinが解釈不可能な数素性と人称素性をともに担うようになった。Top主要部が常に活性化されなくなったことにともない，φPは話題要素としてではなく主語としてFinP指定部を占めるようになった。

（40）後期中英語・初期近代英語（値付与不可能）



ファイ素性指定が不完全な主語φPがFinP指定部にある（40）の構造では，φPはもはや談話から指示性を得られないので（26b）のC-Iインターフェイス条件を満たすことができず，またFinがもつ解釈不可能なファイ素性も適切な値を得ることができない（ここでは文法外の補正操作が利用できないことに注意）。よって，この構造は現代英語の構造（28）と同様の理由によって排除される。結果的に，後期中英語の文法はproの認可に関してS-MインターフェイスとC-Iインターフェイスが課す条件をともに満たすことができなくなり，proは消失した。

6．結　　語

以上，初期中英語から後期中英語にかけて生じた変化をまとめると（41）のようになる。

（41）

英語の「空主語」の消失はV2語順の消失，すなわち話題卓立言語から主語卓立言語への変化と軌を一にして生じており，これらはともに数の一致を表すファイ素性がTopからFinへと推移したことによってもたらされた効果として捉えられる。そしてさらに，この素性継承パラメターの変化は，数の一致を表す動詞屈折接辞の衰退に帰着させることができる。イタリア語やスペイン語とは異なり，古英語・初期中英語では動詞屈折接辞が直接的にproを認可していたわけではなかったが，動詞屈折接辞の衰退がproの消失を招いたという点では，両者は間接的に結びついていたのである。

注

* 本稿は科学研究費補助金（若手研究（B）；課題番号23720251）による成果の一部である。

1．以下，本稿ではproを定形節の左方周辺部で発音されない代名詞をさす一般的な用語として使用する。したがって，特に断りがない場合にはproは主語として認可される場合と話題要素として認可される場合の両方の可能性を含んでいる。

2．テキストの編纂年代と写本作成年代が異なる場合は，写本の年代によって分類している。

3．例外は，M4期のLiber de Diversis MedicinisとRichard Fitzjames' Sermo die Luneであり，特に前者からは複数の用例が検出されている。ただし，このテキストは写本の年代にしたがってM4期に分類されているものの，編纂年代は不明であるので，ことによると編纂当時の文法特性が反映されているのかもしれない。

4．コーパスからの出典は，当該の用例が検出された時代区分，テキストファイル名，センテンスIDの順に示されている。

5．Gelderen（2000）はShakespeareからの（i）の例を挙げ，proが17世紀まで残存したと述べている。

（ｉ）Nor do we find him forward to be sounded, But with a crafty madness *pro* keeps aloof.

(Hamlet, III, i, 8 / ibid.: 147)

しかしこのような例は散発的であり，決して生産的ではなかった。現代英語でも，くだけた文体では文頭で指示的代名詞が脱落することがある。

（ii）a．Hope you're right.

b．Looks a bit put out, doesn't he?

(Huddleston and Pullum (2002: 1540))

このような例をもって現代英語がproを許すという結論を下すことができないのと同様に，（i）の例も文法上の現象ではなく運用上の逸脱と考えるのが妥当であろう。いずれにせよ，本文表1の結果はproが後期中英語には衰退していたことを示している。

6．C-Iインターフェイスのさらなる条件として，屈折接辞のファイ素性指定とφPのファイ素性指定が矛盾してはならないという要件を追加すべきであろう。例えば，（29）においてφPの数素性が[sg.]であれば，Tの[pl., 3rd]と矛盾するため適切に解釈されない。なお，Alexiadou and Anagnostopoulou（1998）はこのタイプの言語では動詞屈折が拡大投射原理（Extended Projection Princile）を満たし，pro（φP）はTP指定部に現れないと論じている。

7．談話連結の仕組みを派生的文法モデルの中にどのように組み込むかという問題については，今後の課題としておく。その際，言語運用上の情報であると考えられる談話的指示機能が，C-Iインターフェイスでいかにして利用可能となるかが問題となろう。ひとつの可能性として，細分化されたCP構造の中にそのような談話情報にアクセスする機能範疇を想定することができるかもしれない（cf. Sigurðsson（2011））。

参考文献

Alexiadou, Artemis and Elena Anagnostopoulou (1998) "Parametrizing Agr: Word Order, V-Movement and EPP-Checking," *Natural Language and Linguistic Theory* 16, 491–539.

Biberauer, Theresa, Anders Holmberg, Ian Roberts, and Michelle Sheehan (2010) *Parametric Variation: Null Subjects in Minimalist Theory*, Cambridge University Press, Cambridge.

Bobaljik, Jonathan David (2002) "Realizing Germanic Inflection: Why Morphology Does Not Drive Syntax," *The Journal of Comparative Germanic Linguistics* 6, 129–167.

Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquiries: The Framework," *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik,* ed. by Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 89–155, MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, Noam (2008) "On Phases," *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud,* ed. by Robert Freidin, Carlos P. Otero, and Maria Luisa Zubizarreta, 133–166, MIT Press, Cambridge, MA.

Fischer, Olga, Ans van Kemenade, Willem Koopman, and Wim van der Wurff (2000) *The Syntax of Early English,* Cambridge University Press, Cambridge.

Gelderen, Elly van (2000) *A History of English Reflexive Pronouns: Person, S*elf, *and Interpretability,* John Benjamins, Amsterdam.

Halle, Morris and Alec Marantz (1993) "Distributed Morphology and the Pieces of Inflection," *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvain Bromberger,* ed. by Kenneth Hale and Samuel Jay Keyser, 111–176, MIT Press, Cambridge, MA.

Holmberg, Anders (2005) "Is There Little Pro? Evidence from Finnish," *Linguistic Inquiry* 36, 533–564.

Huang, C.-T. James (1984) "On the Distribution and Reference of Empty Pronouns," *Linguistic Inquiry* 15, 531–574.

Huang, C.-T. James (1989) "Pro-Drop in Chinese: A Generalized Control Theory," *The Null Subject Parameter,* ed. by Osvaldo Jaeggli and Ken Safir, 185–214, Kluwer, Dordrecht.

Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language,* Cambridge University Press, Cambridge.

Hulk, Aafke and Ans van Kemenade (1993) "Subjects, Nominative Case, Agreement and Functional Heads," *Lingua* 89, 181–215.

Hulk, Aafke and Ans van Kemenade (1995) "Verb Second, Pro-Drop, Functional Projections and Language Change," *Clause Structure and Language Change,* ed. by Adrian Battye and Ian Roberts, 227–256, Oxford University Press, Oxford.

Jaeggli, Osvaldo and Ken Safir (1989) "The Null Subject Parameter and Parametric Theory," *The Null Subject Parameter,* ed. by Osvaldo Jaeggli and Ken Safir, 1–44, Kluwer, Dordrecht.

Kroch, Anthony and Ann Taylor (2000) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English,* second edition, University of Pennsylvania, Philadelphia.

Li, Charles N. and Sandra A. Thompson (1976) "Subject and Topic: A New Typology of Language," *Subject and Topic,* ed. by Charles N. Li, 458–489, Academic Press, New York.

Nawata, Hiroyuki (2009) "Clausal Architecture and Inflectional Paradigm: The Case of V2 in the History of English," *English Linguistics* 26, 247–283.

Nawata, Hiroyuki (2011) "Feature Inheritance as a Reflex of Diachronic Change: Evidence from Transitive Expletive Constructions in the History of English," paper presented at the 13th International Diachronic Generative Syntax Conference.

Neeleman, Ad and Kriszta Szendrői (2007) "Radical Pro Drop and the Morphology of Pronouns," *Linguistic Inquiry* 38, 671–714.

Pintzuk, Susan and Leendert Plug (2001) *The York-Helsinki Parsed Corpus of Old English Poetry,* University of York, York.

Richards, Marc D. (2007) "On Feature Inheritance: An Argument from the Phase Impenetrability Condition," *Linguistic Inquiry* 38, 563–572.

Rizzi, Luigi (1982) *Issues in Italian Syntax,* Foris, Dordrecht.

Rizzi, Luigi (1986) "Null Objects in Italian and the Theory of *pro,*" *Linguistic Inquiry* 17, 501–557.

Rizzi, Luigi (1997) "The Fine Structure of the Left Periphery," *Elements of Grammar: Handbook of Generative Syntax,* ed. by Liliane Haegeman, 281–337, Kluwer, Dordrecht.

Sato, Yosuke and Chonghyuck Kim (2012) "Radical Pro Drop and the Role of Syntactic Agreement in Colloquial Singapore English," *Lingua* 122, 858–873.

Sigurðsson, Halldór Ármann (2011) "Conditions on Argument Drop," *Linguistic Inquiry* 42, 267–304.

Sobin, Nicholas (1997) "Agreement, Default Rules, and Grammatical Viruses," *Linguistic Inquiry* 28, 318–343.

Taylor, Ann, Anthony Warner, Susan Pintzuk, and Frank Beths (2003) *The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose,* University of York, York.

Visser, Fredericus Theodorus (1963–1973) *An Historical Syntax of the English Language,* Vol I–IIIb, Brill, Leiden.

Walkden, George (2011) "Null Arguments in Old English," paper presented at the 2011 Annual Meeting of the Linguistics Association of Great Britain.

Zagona, Karen (2002) *The Syntax of Spanish,* Cambridge University Press, Cambridge.